親父の酒

（一）

遠藤惇は親父の亡くなった年齢に近づくにつれて、一体自分と親父はどんな親子だったのか、思い返すようになった。親父の亘は惇が四九歳の時腎不全で亡くなった。享年八三歳だった。亘の生まれは一九〇三年一〇月だから、日本が太平洋戦争に負けた一九四五年八月を境目とすれば戦前四二年、戦後四一年、ほぼ同じ年数の二つの人生を生きたことになる。因みに母の里は戦前三九年戦後三九年、トータル七八歳でその生涯を閉じている。敗戦の時惇は七歳、小学校二年だから、戦前の記憶はほとんどないが、亘が前後三度出征したと聞かされている。

数少ない戦前の記憶の一つに、亘が出征する日の朝のことがある。出て行くとき、亘は「行ってらっしゃい」と笑顔で挨拶する惇と姉の恭の二人を玄関の前に立たせて、黙って二人の顔に往復ビンタを見舞って無言のうちに出て行ったのだ。突然打擲された姉弟の二人は何故ぶたれなければいけないのか考える暇もなくワッと泣き出してしばらく泣き止まなかった。亘の三度目の出征の時のことである。

一九四四年四月に横浜の国民学校に入学した惇は予断を許さない戦争の行方を心配した家族の意向で宮城県亘理郡山下村(現・山元町)、福島県との県境に近い父親の亘の実家に縁故疎開した。その年の夏休みのことである。惇の母の里も姉の恭も弟の令もこの時初めて亘の故郷に身を寄せたのだが、令は前年の九月に生まれていてまだ一歳にもならない乳飲み子だった。

亘の実家は中程度の農家で亘の家族四人の面倒を見るのに難色を示したわけではないが、特段可愛がるふうでもなく、むしろ働き手として当てにしたように思われる。それまで都会暮らしが続いていた里にとっては農家の嫁を演じるのは難儀なことで、義母はともかく、封建的で厳格な義父の言いつけに従うことは死ぬほどの苦しみだった。何しろ頼みに思う夫は戦地に取られている上子どもたちも長子が小学校四年の恭、次

折葉　沢居

子が小学校一年の惇、三子に至ってはまだ満足に歩くこことも出来ない令という家族構成だったからである。困難な義父母の家での暮らしの中で里の苦しみを理解し何かにつけて庇ってくれたのは義父の実姉だったが、近くに住むだけで同じ家に住んでいるわけでもなかったので、後ろ盾として自ずと限界もあるのだった。

習うより慣れろ、でようやく農家の嫁らしくなってきた矢先、里の許に亘からのハガキが届いたのは一九四五年五月のことだった。千島列島シュムシュ島の守備隊勤務だった亘の部隊が増し続ける敵影を避けて北海道に撤退する途上、苫小牧近くの厚賀の沖合まで来たとき敵艦の魚雷を受けて船が沈没する事態が発生した。偶々運よく救命ボートの近くを巡邏中だった亘はいち早くボートに乗りこんで一命を取り留めたという。北海道札幌の部隊に仮編入された亘がようやく落ち着くことが出来たことで、家族を呼び寄せたいというのだ。亘理郡の穀倉地帯にもときどき敵機が偵察飛行を繰り返すようになっていたこととて、家族の安全をより確かなものにする意味でも、亘の申し出を奇貨として里たちが北海道へ渡ったのは敗戦の年の六月のことだった。

札幌の部隊に仮編入となった亘は間に合わせの少尉官舎として魚屋を営む関水脇士氏方の二階を与えられていたが、もとより五人家族が日々を暮らせる施設にはほど遠く、関水の好意により敷地の中に仮のバラック小屋を建てさせてもらうこととなった。先のことは先のこと、とりあえず農家の嫁の立場から解放されるなら、住まいの条件が悪いくらいはまだ増しだと里は考えた。

バラックへの移住は六月のことで八月の敗戦もここで迎えたが、秋から冬を臨む頃になると、札幌の寒さをどう凌ぐか、部隊からはとうに除隊となり、国に面倒を見てもらえる立場にはなく、自前で処理しなければならない。関脇にこれ以上面倒見てもらうわけには行かず、札幌に相談できる知人がいるわけでもない。冬の寒さから避難するために里は横浜の実家に頼るほかないのだった。

一〇月下旬に五人家族が転がり込んだ里の実家は実母がすでになく、実父と弟家族三人が住んでいたが、船大工のテクノクラートだった父の考えで家屋敷はコンパクトに造られていたから、里たち五人が住む部屋は六畳と四畳半が隣り合う二間に限られた。二階の二間に弟家族、階下の一室に実父が住むと、後は離れたところに位置する応接間しか残らないのだった。敷地

は一〇〇坪ほどの広さだったが、道路面から四、五メートルほどの高みに上物が建てられて、法面にかなりの面積を取られていた。父の趣味で枯れ山水を模した庭に花壇や樹木が配されて瀟洒といえば瀟洒な家屋敷だったが、二家族が同居するにはかなり手狭で不便だった。

淳には祖父に当たる里の父佐藤丑松などの職能集団について、経済評論家で名高い内橋克人氏が書いた次の一文を淳はあるとき偶然目に留めた。誇り高き技術者としての意気軒昂ぶりがよく窺える文章として印象が深い。技術も誇りも高い船大工だったと聞く丑松は自分と干支が同じ淳に「偉くなれ」と言って七二歳で死んだ。

◆（内橋克人の文章より）

誇り高き技術者の職能集団

第一次大戦前後、未曾有の好況を謳歌し、資本主義の基礎を固めた日本経済にとり、唯一の悩みは「労働力」不足だった。

当時、台頭しつつあった第二次産業、すなわち近代工業は、どの企業でも生産現場を支える熟練工の確保に四苦八苦しなければならなかったのである。

腕に覚えの熟練技術者たちは、農民や商店主らと同様、自立した労働者だった。

彼らの多くは、大企業の組織官僚制からも、昇進・昇給制度を枠組みとする従業員管理制度からも独立した、『自由なる勤労者』として歩き、よりよい待遇・報酬の条件を求めて、奔放に企業から企業へと渡り歩いた。

造船産業を例にとれば、そこでは企業の丸抱えでない、独立系の職人集団が錨打はじめ多くの造船工程を担っていたのである。

船台の上で鉄板と鉄板を鋲で締め、空へ、空へ、と船体をかさ上げしていく。軍事用艦船も民間の商船も、そのようにして建造された時代、鋲打の工程を担ったのは造船職人たちの独立チームだった。

初期の頃、それは「六人炉」と呼ばれた。

炉とは鋲打に当たる職人集団の一単位を指すが、後に合理化が進み、一単位当たりの人数が減少するにつれ「五人炉」から「四人炉」を経て「三人炉」へと集結していった。

チームを構成する一人ひとりの技能者は文字通りのスペシャリストたちである。

まず、「横座」と呼ばれるリーダーがいる。横座は自ら大小のハンマーを握り、力を振り絞って鋲を打ち込んでいくばかりでなく、打ち込んだ後の鋲代(鋲の頭)をはったり、丸シメで馴らしたり、次に説明する「先手」と協力しながら丹念に仕上げる。

鋲を打ち込むときは強力な腕力が必要であり、微細な仕上げにかかれば、今度は繊細で器用な手作業の藝が要求された。

いかに不良鋲を出さず、いかに1本でも多く鋲を打ち込むか、そのためにいかにチームの士気を高く維持するか。結果はたちまちチーム全員の報酬の多寡にハネ返った。

意志が強く、勝ち気で、覇気に富んだ若者でなければ、横座は到底務まるものではなかったといわれる。巨大な艦船の船腹も、結局はこうして一枚一枚の鋼鉄を鋲打によって貼り合わせていくことで形成された。リーダーの横座に対して、これを助ける女房役が「先手」である。

先手は横座の相方であり、ナンバー二の役割を果たす。作業の現場では、たとえば甲板で鋲打に入るときは、横座と先手が「ただ構え」の姿勢で向かい合って立ち、穴から出てくる鋲先を待ち構える。

真っ赤に焼けた鋲を穴に入れるのが「取次」であり、当盤鋲の頭を下から押し上げるのが「押し方」の役割り、といった具合である。

鋲先が姿を見せるやいなや、間髪を置かず横座、先手の掌にある鉄製のハンマーが交互に振り降ろされる。

他に「鋲焼き」「鞴(フイゴ)吹き」など。

このように横座、先手、押し方、鋲焼き、取次、鞴吹からなる六人衆がチームを組み、一人ひとりが高いスペシャリティを発揮しながら作業を進めた。チームの数は一つの造船所に七、八組。その七、八組で一船当たり六〇万本ほどの鋲を打ち込み、船台の上に次々に巨大な船舶を建造していった。

彼らの報酬は期限内に打ち込んだ鋲の本数で決まる。チームとチームの間の競争心と、逆にチーム内の仲間意識が、人間が担うにしては激し過ぎるほどの過酷な労働を支えた、といえる。

そして、これは一例に過ぎない。造船産業に限らず、勃興期の日本資本主義の中枢部をなす近代工業を担ったのは、まぎれもなく自立した職人集団であり、彼らは自らの技能・技術をより高く評価してくれる職場を求めて、誰に遠慮気兼ねもなく集団移動を繰り返した

のである。

この熟練技能の労働市場こそ圧倒的な売り手市場であった。工賃の単価は働く側に有利に決まり、職場の選択もまた彼らの意のままだったといえる。労働はこの上もなく主体性を誇っていた。

やがて企業側の対抗策が打ち出されるようになったのである。ひねり出されたのが「終身雇用」であったことはいうまでもない。

戦争に取られる以前、亘は私立中学で英語の教師を務めていたが、学制が整っていなかったため敗戦後直ちに元職復帰を果たすことが出来なかった。当面一家を養うため亘はその英語力を手がかりに駐留軍総司令部(ＧＨＱ)で臨時雇いの通訳と検閲の仕事につくのが精一杯のところだった。手許資料によれば、当時のＧＨＱの大規模な言論統制について、元駐タイ大使などを務めた岡崎久彦氏が著書の中で「占領軍の検閲は大作業でした。そのためには高度な教育のある日本人五〇〇〇名を雇用しました。給与は当時、どんな日本人の金持ちでも預金は封鎖され、月に五〇〇円しか出せなかったのに九〇〇円ないし一二〇〇円の高給が支払われました。その経費はすべて終戦処理費だったのです」と書いている。

当時亘がどれほどの給与を支給されていたのか惇には不案内であるが、亘は検閲対象の本の中から子ども向けのものを選んで、「これは三日以内に読め」、とか「これは明日まで」、とか言って惇たちに雑多な本を読ませたものだった。ときに亘が持ち帰る真っ白な食パンがどれほど美味でどれほど貴重だったか、家族みんなが思わずワッと歓声を挙げて迎えたものだった。このときの読書が後年の惇の職業選択に大きな影響を与えたと言うことができるようである。

亘がかつての私立中学の同僚大場光男の尽力によって横浜市立高校の教員になることの出来たのは一九五〇年四月のことで、大場自身が先行して横浜市立中学の教職に転職していて亘に道を開いてくれたのだった。

ようやく正規の教員としての職を手に入れたとは言え、当時の教員の待遇は惨めなほど低かったから、生活を守るためやむなく誰もが副業に精出すというふうで、亘は総司令部勤務の時に始めた密造酒造りをそのまま続けた。その頃酒飲みの欲求を満たすだけの酒の生産は不足して、とても需要に追いつかなかったから、怪しげな密造酒・密売酒の類がどこからともなく出回

り、飲んべえの期待に応えたのだ。化学薬品として造られたメチルアルコールを飲んで失明したり落命したりする例のニュースが新聞紙上を賑わしたのもこのときのことである。

亘が造る密造酒は米と麹に酒石酸を原料とするどぶろくだったから安心安全なアルコール飲料で、人づてにそれなりの人気が出て造れば造るだけ売れる時期もあった。しかし、家族五人が暮らす二間限りのスペースを広げるわけには行かず、造れる量は知れたものだった。何しろ違法な密造酒を造って売るわけで、大ぴらとは行かない。原料の米は無論闇米で、どうしてこんなに大量の米を買うのか、どうも怪しいと官憲に目をつけられたら、一巻の終わりである。怪しまれないよう細心の注意を払って慎重の上にも慎重を期さねばならない。こうして亘が思いついたのは息子の惇を運び屋に仕立てることだった。惇は小学校六年から中学一年にかけて、暮夜密かにリュックサックに詰めたどぶろくを二本買い手の居宅に届けたのである。無論、たびたびというわけには行かないし、同じ家に何度も届けることも避けなければならない。どこから足がつくか判らないのである。

幸い家屋敷が道路面から一段高く位置していたので匂いから足のつくことはなかったが、いつまでも危ない稼業を続けるわけには行かず、亘は二年ほどでどぶろく造りに終止符を打ったのだった。結局収支を決算してみれば、自分の飲み代がただになるぐらいのことだったかもしれない。

（二）

思い返してみると、惇の記憶に残る親父の思い出はさほど多くはない。惇が幼少であった頃のことで思い出すのは断片的なことばかりだが、どうやら亘はその頃流行のスパルタ教育を信奉し実践していたように思われる。両手の掌を紫色に腫れさせて帰宅した親父が、今日は二〇人の生徒に往復ビンタを食らわせて手が痛くてかなわない、などと話すのを聞いた記憶がある。それを惇はそんなこともあるのか、という程度に聞き流したものであったが、戦後の高校では、借り物の民主主義が横行し始めていたから、さすがに往復ビンタを見舞うこともなくなっていたようだった。

里の実家からの脱出は亘が市立高校勤務になってからのことであり、共済組合からの借入金で自前の家を建てたのだった。そしてこれが一段落するとすぐ、親

父は返済資金稼ぎのための副業として家で中高生向けの学習塾を開いた。初めのうちは週に二日ほどだったが、その頃のブームに乗ってだんだん人気が高まり、毎週日曜日を除く六日を開塾日にするまでになっていった。当時も公務員は兼職禁止が建前だったが、インフレに追いつかない薄給の待遇では公権力が建前を押し通すことはとてもできない相談で、教員のアルバイトは黙認というより、常識と言ってもいいほど大ぴらだった。惇が高校生になると、亘が所用で定時に帰宅できないときなど、中学低学年のこどもの勉強を惇が代わって教える機会も増えていった。

惇はこうした親父の副業の代行が特に不快でもなく不満でもなかった。高校の教師ならば、放課後の会議もあるだろうし、部活動指導もあるだろうから、毎日判で押したように五時までに帰宅することは難しいのではないかと思っていたし、代わって教えていて、子どもが自分の教えたことを理解する瞬間に気づくときなど、教える楽しさも味わうことが出来たからだった。

代行と言えば、惇が中学二年の頃、親父の亘に代わって山下村の亘の実家に赴いたことがある。年長の従姉の結婚式だったか、祖母の告別式だったか、とにかくそういう冠婚葬祭のときで、「亘の名代で来ているのだから今日の惇ちゃんは一人前だ」と言われて、皆と同じ立派な座布団に座らされて一丁前の脚付き角膳を振る舞われた記憶がある。後年事情通の従兄の話によると、その頃の亘は実の兄弟との間で喧嘩状態にあって、顔を出すと騒ぎが大きくなるのを心配したからだろうということだった。

同じ頃、多分職場の忘年会か年度初めの離着任教員の歓送迎会かで、惇は親父の付き添いで宴会に列座したことがある。どうして、教員仲間の宴会の席に座っていたのか惇には判らないが、とにかく宴会に出て宴会料理をご馳走になったのだ。亘の言い分では、酒を飲むと足下が覚束なくなって心配だからついてきてくれ、ということだったが、宴会は酒が入ると乱れて卑猥になるもので、初めのうちこそ中学生が同席していることへの配慮もあったはずなのだが、座が深まれば酔いも回り、酔いが回れば遠慮も配慮もなくなる道理で、宴たかなわともなると猥歌を唄う輩、「オ〇〇コ、〇マン〇！」を絶叫する輩などが続出した。惇は、大人というものはだらしないものだなと思ったりした。その日、亘は付き添いのいることにすっかり安心したのか、途中乗換駅を間違えそうになったりして、惇がちょっと手こずらされた程度でまずは無事に帰宅する

こととなったのだった。
亘は三人の子どもたちの教育についてはそれなりに熱心だったが、とりわけ惇に対しては厳しく接した。惇が小学校高学年だった頃、盛んに亘から言い聞かされたことがあって耳にタコができるほどだった。「お前は自分で頭がいいと思っているかもしれないが、惇程度の頭の持ち主は全国レベルでは掃いて捨てるほどいる。決して頭がいいなどと思うな」と言うのだが、親父に言われるまでもなく、惇は自分が頭がいいと思うことはまるでなかった。そういうことは考えもしないというほうが事実に近いかもしれない。利発という点で言えば、姉の恭は亘がしばしば「恭が男の子だったらな」とこぼすぐらい利発な上、物事の割り切り方が大胆で決断力に富む子だった。
昭和のいわゆる高度成長時代に跋扈した教育ママの伝で言えば亘は教育パパと言っていい。始まったばかりの六三三制の公立中学が荒れているという風聞を真に受けて恭と惇を私立の入学へ進学させた。惇の高校受験ではいわゆる寄留という手立てを講じて県下一と言われるS高校へ行かせた。単に住居だけの寄留でなく、選んで進学させた私立中学を辞めさせてまでS高校の学区内の公立中学へ転校させたのだ。その転校初日のこと、淳が昼休みに男子トイレに入って小用を足しているところへ級友の一人がずかずかと近づき、脇から覗き込んで「何だ、大してでかくねえや」という率直な熱烈歓迎のご挨拶を受けたとき、淳は、これは大変な学校へ転校してきたものだと慨嘆しないわけにはいかなかった。
この藤沢市立M中学への転校はまたしても友人大場の手を煩わせるものとなった。「親子二代に渡って大場には世話になった」というのがしばらくの間亘の口癖になるほどだったが、大場の親切に対して亘がどれほど具体的に感謝の気持ちを表したか惇には何も感じられるところはなかった。惇の目から見て、亘にこの人と言えるような友人はいないようだったし、友人が家を訪ねてくることも全くないことだった。
疎開先の小学校で惇が神童と言われたことのあるのは確かだった。担任は山下小学校の石山先生といったが、惇の転校後間なしに産児休暇に入ったときのこと、当時は産休代替の教員がすぐに配置されるのは稀でしばらく空白の日が過ぎたのだが、掛け持ちで面倒を見てくれる教師にも事欠く始末だったとき、惇は皆に推されて教壇に立ったことがある。何をどう料理したのかまるで惇の記憶にはないが、国語や算数で何かもの

を言ったらしい。皆に推されたのは転校後すぐのことでまだ言葉がなまっていなかったためらしかった。惇の教壇活動は間もなく中止になったが、その頃には惇の言葉が標準語に代わってすっかり土地の方言に馴染んだためらしかった。

山下小学校の石山先生と記憶に残っているのは札幌に疎開したときの学校が石山小学校で担任が山下先生だったからにほかならない。惇にはこの取り合わせがとても妙に思えたのだ。

幼い頃の親父の記憶でもう一つ鮮明に残っているものがある。惇が小学校三、四年だった頃、やはり田舎へ親父と惇が何か慶弔のことで出かけたときのことだが、惇は親戚の小父さんや小母さんからお小遣いをもらった。遠くから偶に来た小学生にちょっとしたお小遣いをやるのはその地の習わしだった。確か一〇円、二〇円の単位だったと思うが、まわり中が一〇円を惇に与えていたときA叔母が奮発して五〇円をくれたのだ。惇はもちろん亘に知らせないで独り猫ばばしようと思ったわけではないが、何しろ何人もの小父さん小母さんからのいただきものだったので、そのときはそのままポケットに仕舞った。

何時間か経ったとき亘は皆のいる前で「A叔母からいくらもらったか。一〇円か」と惇に聞く。惇が不決断に「うん」と答えると、亘は烈火のごとく怒って「惇は何故ウソをつくか！」と言った。惇はあっけにとられて呆然と見ていると、亘はやにわに身体を投げ出して地面をごろごろ転がりながら「惇がウソをついた。惇がウソをついた」と怒鳴ったのだ。惇はことの次第にただ驚いて何も言えないでいた。

一〇円をくれた小父さんや小母さんの前で「A小母さんには五〇円もらった」とは言えない気がしたのだ。一〇円をくれた好意が台無しになると思ったからだったが、親父の突然の憤激のさまを目の当たりにして何もものが言えないのだった。惇はこのとき自分が何と気弱な性格であることか情けない気持ちで一杯になった。親父はA叔母から惇に五〇円与えたと聞いていたに違いないが、何故惇がもらったのは一〇円だったとウソをついたのか真意を確かめようともしないで狂態をさらすだけだったことにとてもがっかりしたことも覚えている。

(三)

思い返してみると惇は親父の亘と芯から胸襟を開い

て言葉を交わした記憶がほとんどない。いつも遠慮とか気兼ねとかの夾雑物が立ちはだかっていた。言っても判ってくれないとか、叱られるのがオチだという思いが先に立って打ち解けた話にならないのだった。煙たいという気分も十分に持っていて、姉の恭や弟の令が何の気兼ねもなさそうに亙と言葉を交わしているのを見てちょっと不思議な気がしたものだ。惇が大学に進学したときも、就職先を決めたときも、すべて独断で誰にも相談しなかった。亙にも里にも事後の報告はするけれど事前の相談はしないのだった。惇の結婚は早かった。一家を構えるためだったのは確かだが、早く家を出たいという動機も強かった。一歳年下の朝倉鈴とは大学の文芸サークルで知り合った。惇が評論などを得意としているのに対して鈴は詩や短歌俳句が得手だった。鈴が大学を卒業し公立中学の国語教師になった翌年惇と結婚したのだった。二人の新居は千葉県船橋。鈴の実家近くの公団住宅だった。この結婚を機に惇は親父とさらに疎遠になっていった。

亘も惇も酒飲みだった。どちらかと言えば強いほうの部類に属すると言えるだろう。だが、惇には親父と酒を酌み交わした記憶はない。酒の飲み方も対照的で、亘が日本酒などの醸造酒を好むのに比し、惇はウィスキーや焼酎など蒸留酒を好んだ。亘はほぼ毎日、晩酌したが、惇にはまだ晩酌の習慣はなかった。

亘の酒はほどほどで済めば問題はなかったが、酔いが深くなるまで飲むと見境がなくなるようだった。あるだけの酒を飲んでしまおうとするのだ。里は毎晩酒の隠し場所を工夫して亘に見つからないように気を配らないではいられなかった。亘はまだ酒があるはずだということになると、家中探し回るのだ。里の工夫が実らずに酒が見つかって出てくると本当にあるだけ飲んでしまうのだ。そしてときに家中探し回っても酒の見つからない結果になると、亘はプイと外へ出て馴染みの小料理屋などにしけ込むことになるのである。恭のまだ幼かった時分、亘の膝に座って「とうたん、ニゴ飲むの？」とあどけなく聞くのが常だったと惇は里に聞いた覚えがある。「ニゴって判る？　お父さんは二合飲もう、とよく言っていたのよ」

惇が鈴と結婚するときすんでのことで破談になるところだった。鈴の両親が念のためにと思って興信所に調査を依頼したところ、父の亘が酒乱の気味があるという調査結果が報告されたためだった。酒を余り嗜まない朝倉家にしてみれば、娘の嫁ぎ先の舅が酒乱の気味があるというのは見過ごしに出来ないことだった。

興信所の調査がやや杜撰で、オーバーな言い回しになっていたことも判明して破談を免れたということだった。

遠藤家の家計は常に苦しかった。だから密造酒を造って密かに売りさばいたり、家で学習塾を開いたりしたのであるが、副業も連日に渡るようになればそれだけストレスが増すというものだ。亘の晩酌はストレス解消のためであったが、ときに行き過ぎともなると却ってストレスを増す結果になってしまうようだった。

里はよく「お父さんはみんなより一〇年遅いのよ」とこぼしたものだった。確かに四六歳での中途採用の高校教師では給与は知れたものだったろう。ただでさえ地方公務員の待遇は低かった上、当時の教員はその公務員の中でも薄給の代名詞になるほどだった。亘の現役時代はまだ公務員の定年制はなく、働きたければいつまでも働くことが可能だった。校長や教頭といった管理職には一定年齢での退職勧奨があって、これを拒むことは慣例的に出来ないことだったが、平教諭の身には退職を強制されることはなかったから、亘は七〇歳まで常勤教諭として働いた。これと言って趣味のない亘のせめてもの憂さ晴らしだったかもしれない。亘が退職した一九七四年は狂乱物価といわれるほどのインフレが横行しているときだったが、亘はようやくそれなりにまとまった退職金を手にすることが出来たのだった。

亘も里も明治の生まれだから家父長制への傾斜が強く、老後を託すのは長男の惇という考えが根強かったが、現実のこととすれば、ほとんど行き来のない惇より、ずっと一緒に暮らしてきた末子の令に頼るほうが自然だと思うようになった。

「お母さんとも相談したんだが、私たちももう相当年を取った。老後は三人の子どもの誰かに面倒見てもらわなければならない。あれこれを考えた末出てきた答えは、令、お前に私たちの面倒を見てもらえまいかということだ」

「ボクはまだ独り者だから結婚してどういうことになるか判らない。本来なら兄貴に面倒を見てもらうのが筋だけれど、親父たちがそういう気持ちでいるなら考えてみてもいいよ」

「惇は長男だから順番から言えば当然彼奴の出番だと思うんだが、ここしばらくほとんど没交渉になっている上、彼奴のところは千葉の公団住宅だから手狭で私たちが押しかけていくのは考えものなんだ。この年になって馴染みのないところでの暮らしを考えると二の

足を踏むというものだ」
「兄貴は薄情で早くから家を出た。姉貴は他家に嫁に行った身だから当てにするわけには行かない。となれば、貧乏くじを引くのはボクの役目かもしれないな」
「そう言ってくれると嬉しいな。もっともまだ今のところは二人で暮らせる元気はある。実際に面倒を見てもらうのは私かお母さんが逝ってしまって一人残された後のことになるだろうが、そのときはどうかよろしく頼むよ」
「まあ、兄貴ともよく相談して決めることにしよう」
令の優しい言葉にすっかり安心した亘と里は人生の最後を令に託すことに心を決め、そういう構想で令に傾斜していく。
敗戦後転がり込んだ里の実家からの脱出のために建てた家はバラック同然という代物でとうに耐用期限が切れていたため、家を購入することにしたが、その場合でも具体のことは令の意見を容れた。車を置くスペースを確保するため、場所はそれまでの東横線沿線から引っ込んだ横浜線沿線の田舎に決めた。土地は借地。元々亘には家屋敷に対する執着心は薄く、戦前はどこにでも見つかる借家の暮らしだった。
大学を卒業して製薬会社に入社した令はいわゆるプロパーとして病院まわりをしている間に同じプロパーの鎮子に出会って結婚し家を出た。鎮子が舅姑との同居を嫌ったからである。亘と里は令たち夫婦がまだ若いのだからそれも当然だと納得したが、いずれは令たちと一緒に暮らすのだということを令たちに改めて確かめたりするのだった。

(四)

淳は大学を卒業すると同時に広告代理店に就職した。遮二無二働いて身体を壊しかけたこともあったが何とか乗り越えて順調にポストも上がっていった。しかし、地位が上がって責任の度合いも高くなると淳は次第に社の方針に疑問を抱くようになり、違和感を増大させていった。どちらかというと淳は個人志向が強く社の組織主義に飽き足らなくなるのだった。淳は本音主義だが、社は建前尊重である。ポストが低いうちは発言の影響も小さいが、地位が上がれば発言を巡って軋轢を増す。淳が企画室次長に就いて間もなく開かれた企画会議でのこと。何か奇抜なキャッチコピーはないかという常連のクライアントからの依頼について検討中の淳の提起が物議を呼んだ。

『『悪事はバレるまでは悪事ではない』というのはどうでしょう」
「代理らしい率直なフレーズでなかなか面白い」
「仰る意味はよく判るが、公的なキャッチコピーとしては行きすぎだと思う」
「本音ではそのとおりだと言えるけれど、さすがにきついね」
「教育畑のほうからクレームのつくこと請け合いだ」
「ウソももちろん悪事の一つだが、確かにばれるまではウソにはならないね。警察や検察の取り調べで自白を強要するのはほぼ公然たる事実だが、警察や検察は容疑者が強要されたと訴えても、自白を強要した事実はないと言い張るね。また辞任する大臣の理由は九分九厘まで体調不全だしね」
『『表通りは建前、本音は裏通り』というのはいかがです」
「そのくらいなら検討に値するかな。クライアントがどう言うかちょっと当たってみてもらおう」
『『政治の世界ではウソは言い放題』なんていうのもありますね」
「今日の遠ちゃんはまたバカに活発だね。代理になって張り切っているのかな」
「確かに昨日まで一二〇％出馬しないと公言していた候補者が、翌日突然議員選挙に出馬すると言い出しても、誰もその候補者をウソつきだと指弾したりはしないな」
「しかし政治の世界はそれこそ建前重視だからそんな本音を言えば袋だたきに遭うは必定だ」
『『人は人。物は物。人を物として扱うな』というキャッチコピーはどうでしょうか。一目惚れなどというのは大抵人を物として見ることから来ているように思いますが」
「いかにも泥臭い言い回しの感じだな。洗練された言い方があれば考えてもいいね」
「最近、ウソに二種類あると気づきました。一つは普通のウソで、言葉で表されるウソ。もう一つは言わないウソとでも言うべきウソのことです。普段吐くウソを陽性のウソとすれば、こちらは陰性のウソということになるでしょうか。本来ならば言わなければいけない事実をあえて言わずにいることで結果として騙すことになるウソがあると思うのですね。審議会の答申などで出された少数の正論を隠して言わない。多数で押し切った偽りの結論だけを公表して間違った方向に導く。こうしたことが何年も経ってから明るみに出て皆

騙されていたことに気づくなどということがありますね。活断層の上には原子力発電所の枢要な施設は建設を許さないという規制のあることを承知の上で原子炉を建てて、何年も稼働させた後で実は下を通るのは活断層ではないかという疑問が出される。調べてみると、当初からその疑問が提起されていたのだが多数派が押し切って原子炉を建ててしまっていたことが判るというのは実にお粗末な展開ですが、突き詰めれば、言わないウソが隠れていたことになるわけです」

淳は自分が試みに言い出したキャッチコピーが社内の会議に限った発言だとしても到底受け入れられるはずのないことは重々承知の上でのことだったが、問題提起に対する周囲の空気には馴染めないものを感じて、次第に身を引くようになり、挙げ句の果てに一五年余勤めた広告代理店を退社することにした。淳は、その道で権威のあるM新聞社が主催する『地方の時代においていかに地域の活性化を図るか』という論文コンクールに応募して見事三席に入賞したことを契機として、日頃書きためた評論を整理再考しながら評論家としての道を歩こうとしたのだ。

幸い、広告代理店勤務を通して知り合った某会社社長S氏が応援を約束してくれた。淳の転身を知って講演を依頼してくる企画もそれなりの数に上った上、地味ながら講演録を出版してくれる出版社の手も挙がった。こうしてうまく評論家の道を滑り始めた淳の行く手に待ったをかける出来事が出来した。

一九七九年四月、わが国では初めて養護学校の設置が都道府県に義務づけられたのだが、これはそれまで教育の対象とされていなかった心身に障害を持つ子どもたちを教育制度の中に組み込むという意味で画期的な改革だったが、障害当事者の間では必ずしも義務化賛成という意見ばかりではなかった。

こういう中で淳はM新聞社の依頼を受けて養護学校の義務化を歓迎するという趣旨の解説記事を寄稿したのだ。時日が切迫していたこともあり、いわゆる障害児を教育の対象に含める趣旨は推進していいと考えたからであるが、十分な事前の取材を省いて解説文を書いてしまったために、義務化に反対する障害当事者から予想以上のクレームを突きつけられた。抗議は全国から寄せられたが、とりわけ学区の小学校への自主登校運動を展開する東京都足立区のKK君のグループからの意思表示は強烈だった。

養護学校二年に在学中だったKK君は一九七八年、弟の入学した地元の小学校へ自分も行きたいと言い出

した。脳性麻痺者である彼は車椅子を使い、言語も不明瞭で文字版を用いて会話する暮らしだった。親は早速ＫＫを転校させるために養護学校と教育委員会に届け出たのだが、教育委員会は頑として受け入れようとしない。しびれを切らしたＫＫ君は自主登校を始める。小学校はＫＫ君を入れさせないよう固く門を閉ざした。一年以上そのような自主登校が続いた後で、学校側はそれまで利用を認めていた校内トイレの使用を禁止し、それでもトイレを使いたいと校庭内に入ったＫＫ君に退去を迫り、車椅子を押していた支援者の青年は建造物侵入罪と暴行罪で逮捕される事態となった。

当然、青年は裁判で争うこととなったが、養護学校の義務化はその裁判闘争継続中に起きたことで、この義務化にＫＫ君のグループは反対の姿勢を堅持して取り組んだ。障害を持つ者と障害を持たない者とを分離して教育する体制に対して、真っ向から統合教育を求めてたたかいを挑んだのである。全国でたたかう障害者を先頭に義務化阻止闘争がわき起こったが、西のＵ、東のＫがその代表的な存在となった。

「遠藤さん、養護学校義務化に反対する私たちの意見を縷々述べてきましたが、お判りいただけたでしょうか」

「はい。十分理解したつもりです。新聞社から急な要請があったとは言え、文部省の提灯を持つような記事を書いたことは恥ずかしい限りです。これまで教育の対象から外されてきた障害者に教育への道を用意する制度のできることは素晴らしいことだという一面に目を奪われて大事な核心部を見失っていました。これからは障害があってもなくても誰もが分け隔てなく地域の学校に行ける統合教育を進めることができるよう、私もできることに取り組むつもりです」

「それを伺って、安心しました。健筆を振るう遠藤さんにご理解いただけたことは私達の運動にとって百人力を得たように心強く感じます」

「これから私は皆さんの取り組みについてしっかり勉強して、分離教育に固執する文部省の蒙を啓くことができるよう頑張ります。今日はありがとうございました」

「こちらこそありがとうございました。勢いとは言え、失礼な言葉の数々をぶつけて済みませんでした。これからもどうぞよろしくお願いいたします」

ＫＫ君のグループの活動家の皆さんからの抗議を受けて話し合いに臨んだ淳は、かすかに抱いていた危惧が現実のものとなったことに深く反省し、可能な限

り、支援の青年の裁判を傍聴し、支援の論陣を張るのに精を出した。地域の学校に通いたいというＫＫ君の取り組みは彼が区立Ｈ北中学に入学することで一区切りがつき、引き続いて彼は都立高校定時制へ進学し、卒業後は都の障害者労働センターの職員となった。一方、支援の青年の裁判は一九八二年一月に東京高裁で結審し、多くの人々の期待に反して有罪判決となった結果、公務員だった青年は失職することとなった。判決は現行法の枠内で可能な限り統合教育に理解を示したが、刑事事件の結論とすると、行為の目的は正当であるが手段は相当ではなかったとしたのである。

（五）

学校の教員は世間知らずであることで名を馳せているが、淳の見たところ亘の世間知らずは特に著しい。どうやら根がお人好しであるらしく、騙しにかけられたときの被害は相当なものだった。金で苦労した割に金を大事にしないから、狡知に長けた勧誘の格好のターゲットになる。慢性的な貧乏性で金儲けについての欲は深い。儲け話があるとつい乗ってしまうことで何度も失敗した。小金ができてまず引っかかったのは豊田商事だった。小豆相場に手を出して一〇〇万円ほど損をした。初めはビギナーズラックもあってわずかに儲けたのだが、勧誘員の言葉に騙されて投資額を大きくしたところで丸損を被った。後になってこの話を耳にした淳は、玄人でさえなかなか利益を出すのが難しいとされる小豆相場によく手を出したものだと、その世間知らずを哀れに思ったものだ。世間知らずで欲張りなのは亘に限ったことでなく里もまた何度となく騙しに逢った。化粧品の訪問販売、高級下着や学習参考書などを手がけて利ざやを稼ごうという話に乗って、代金は払わされるが品物は売れず、扱っただけ損ということもあった。あまり仲のよくない夫婦だったが、この点では似たもの夫婦だった。いつの損の場合でも「自分が損しただけで他人様に迷惑をかけたわけでなし」などと言って恬淡としていたと言うから始末に悪い。晩年、里に先立たれて独り住まいをしていたとき、亘は欲と二人連れの勧誘員の目先の親切にころっと騙されて言うなりに金を出すこともあったらしい。

「肩を揉んでいただいてありがとう。お陰ですっかり軽くなりました。今鰻を注文したところですから、食べていってください」などと下にも置かないもてなしで、謝意を表すこともあるというのだ。会員権つきリ

ゾートホテルに入会したこともあったが、考えてみれば、もう一人で旅行するほどの元気もなく、どうしてこんなものに引っかかるのか、淳には理解の外のことばかりだった。

騙しに逢いやすいお人好しは晩年の生活設計においても思うように行かない結果となった。淳を見限って令に老後を託そうとした投資も結局上手く運ぶことはなかった。令に初めから騙すつもりがあったかどうかは定かではないが、体よく逃げられたことだけは確かだった。会社勤めの令にとって転勤は宿命だったが、令が福岡へ転勤ということになったとき、亘はかねてからの約束だ、とばかり、里を伴って令について福岡へ行くと言いだしたのだ。慌てた令は兄弟で話し合うからと言って亘を留め、早速、恭と淳を呼び出して鳩首会談に及んだ。

「確かに親父たちの老後は俺が面倒見るようなことを言って親父をその気にさせたかもしれない。でもそれは俺が横浜にいるというのが前提で、転勤先までついてくるのを受けると言った覚えはないよ。それにあれは俺がまだ独身のときのことで、結婚すればまた事情は変わるのさ」

「親父も本気で福岡まで行くつもりはないだろう。心細くなって老後の担保を確かめるだけだったんじゃないか」

「兄貴頼むよ。女房はとてもあの舅や姑とつきあって行けそうもない。お嬢さん育ちで三日と保たないし、無理はさせられないよ」

「それはうちの鈴も同じだ。親父の老後は令が見ることで暗黙の了解ができていると踏んでいるから、今急に言われてもどうしようもないな。令だってそのつもりで結構美味しい話を楽しんだのじゃないか。鈴をその気にさせるには、時間をかけて説得するほかないだろう。親父たちもまだ二人揃ってそれなりに元気だから、今すぐどうと言うこともあるまい。今日のところはそういうことで結論は先送りとしよう」

こうしたやりとりを残して令の一家は福岡へ赴任していった。それからしばらく何年かが経過して、入退院を繰り返しながら尿道ガンを罹患した里があの世に旅立ったのは一九八四年一二月のことで享年七八歳だった。ＫＫ君の自主登校事件を巡って挫折しかけた淳はその後一回り大きく回復して、里の葬儀は見栄張りの里に相応しい盛大なものとなった。後に残された亘はその後二年ほど独り住まいの暮らしを送ったが、病を得て最後は淳の許に引き取られた。令は転勤に次ぐ

転勤で横浜に帰ることがなかったためである。

八〇歳を過ぎて身体がもう言うことを聞かなくなってからも金に対する執着心は衰えることがなく、結果として損を重ねた。その頃から亘宛に次のような怪しげな郵便が配達されるようになった。

重要　最終認定通知

賞金割り当て委員会により、遠藤亘様が当選資格保持者として認定されました。当選賞金総額は三七〇、〇〇〇、〇〇〇円を上回ります。賞金受領のため、今すぐ下の本人確認書に必要事項を記入し、指定された住所宛に速やかに返送してください。返信を怠ると全資格が取り消されます。なお、賞金手続き手数料として一、〇〇〇円をお支払いください。

このような手紙が到来すると、亘は総額三億七千万円の賞金の一部が送られてくることを露疑うことなく、手数料一、〇〇〇円を添えて返信するのである。当然のことながら、これに対して賞金割り当て委員会から賞金が送られてくることもなく、結果としてただ手数料を召し上げられることとなるわけだった。亘は「向こうも忙しくてなかなか手が回らないのだろう」などと呟くだけで、また、**亘さん、当選おめでとうございます。**などで始まる手紙を受け取り、指定された手数料を支払う手続きを取ることを繰り返した。高額賞金を受け取る夢を見るためだけの手数料として亘は生涯どれほどの損を重ねたことだろう。

亘が千葉県立病院において八三歳の生涯を閉じたとき、手許の預金は五〇〇万円を超えてはいなかった。老後は令に託すことを期待して、令の言うまま生前贈与を繰り返したり、「当選おめでとう」の手数料を払い続けたりした結果だった。生前の亘はほとんど無趣味と言ってよかった。カメラをいじるわけでもなく、映画を観ることも稀だった。退職後は里を伴って小旅行をすることもあったが、自ら提唱して出かけると言うより、里にせがまれて旅に出たというほうが事実に近いと思われた。

そうした無趣味の亘の暮らしの中で唯一の例外は演歌を歌うことだった。家での学習塾の副業が終わった後とか、独りで酒を飲むときとか、ときを選ぶことなく亘は演歌を歌った。お気に入りは三橋美智也やフランク永井、春日八郎などで、古いところでは東海林太郎なども歌った。お世辞にも上手いとは言えなかっ

たが、いつも歌い続けていたために声量は衰えることなく小節もきくようだった。亘は演歌の他故郷宮城県の民謡「さんさしぐれ」なども好んで歌った。まだカラオケなどは開発されていなかった時代、偶に家を飛び出して街の飲み屋へしけ込むのも、あるいは「あら遠ちゃん、歌、お上手ね」などと言われたかったためだったろうか。晩年淳の許で暮らすようになってからは、さすがに演歌も民謡も歌うことはなくなった。年齢が高じたことも一因かもしれないが、部屋が狭く歌声は近所迷惑になることを気にしたためかもしれなかった。

淳が大学生だった頃、何かの間合いで亘と二人だけになったとき、亘が少し改まった顔で「淳。お前にちょっと話しておくことがある。何かと言えば、わが遠藤家の血筋には好色の血が流れているということだ。田舎の叔父たちが浮き名を流して顰蹙を買っていることはお前も知っているだろう。好色の血は紛れもなく私にも流れているし、淳、お前にも流れている。心して、この血が騒ぎ出すことのないよう気をつけておくれ」

淳にも成人した息子がいるが、改めて遠藤家の血筋についてもの申す自信は自分にはないなと思った。息子はまた淳に向かって「ボクはお父さんを尊敬している」と真顔で表明したことがあり、淳はとても感激した記憶があるが、自分はついぞ親父を尊敬することはなかったと思った。

淳は親父の酒がいかなる酒だったのか、思い返してみても答えはなかなか見つからなかった。もしかしたら遠藤家の血の騒ぎを発散させるための酒だったのかもしれないと思った。

かくて最後に淳の酒。もし万一淳の息子が「親父の酒」について何か書くときがあれば、その参考までに書いておくことも悪くはないと淳は思うのだった。淳は最初の広告代理店勤務だったときに徹底的に酒を教えられた。飲み方はもちろん、飲ませ方も酒の殺し方もそのとき鍛えられた。酒飲みの生態についても勉強した。淳の酒は飲み始めるとすぐ酔うのだが、それからが長い酒である。初めて淳と杯を交わす御仁は「俺のほうが酒は強い」と思って安心感を抱くのである。最初の酔いからある一定のところまで、全く酔いが進まないのだ。酔いが回るときは必ず前兆がある。かすかな耳鳴りがするのだ。このかすかな耳鳴りを無視して飲み続けると酔いが回り始める。無視せずに耳鳴りがしたとき酒を止めれば酔いは表に出ないし回りもし

ない。酔いが回り出しても酒を続けると仕舞いには吐き気を催す。吐き気を催してなお酒を続けるとおう吐するが、吐き気とおう吐の間はかなりの時間があるから、そこまで行って止めても周囲にはそれと気づかれることはない。酔後に麻雀を誘われることもあればカラオケにつきあわされることもあるが、それは淳にとって酒が入っても入らなくても同じことだった。酒の上の失敗は淳には無縁のことであった。

七〇歳を過ぎても淳は酒と親しみ続け、講演と著述の合間に酒を嗜んだ。特に身体に悪いところが見つかったわけではないが、健康維持のために飲酒は二日に一回ほどの割合を保つよう心がけた。いわゆる休肝日の要が騒がれはじめてからのことである。酒は何でも飲むが、好みは焼酎や泡盛の類だった。馴染みの寿司屋で三〇度の焼酎・玉の光に巡りあってすっかり気に入った。京都伏見の玉の光の本流は清酒であって、若い頃淳も日本酒の玉の光を愛飲したことがあるが、焼酎を出していることはついぞ知らなかった。清酒もいいが焼酎はなおいいと淳は思った。泡盛は学生の頃、コンパでよく飲まされたものだったが、そのときはただ強い酒という感じがするだけで旨いとは思わなかった。多分定価の安い泡盛だったせいだろう。老齢になってから淳が親しんだ泡盛は、「古酒瑞泉」を初めいくつかあり、石垣島の「黒真珠」や「残波」が特に気に入って愛飲するようになった。一回一合から一合半、三〇度のものをオンザロックで飲むのを習慣にしている。

こうした中で、淳が七五歳を過ぎたある夜のこと、昔の部下と久しぶりに一献傾けた後、「ああ、酔っ払ったな」と感じることがあり、そのときはかすかな耳鳴りもなくいきなり酔いが回ったと思った後の記憶がまるでなくなるという事態が出来した。切れ切れの記憶が戻るところは、多分ＪＲ船橋駅の階段を下りる途中で滑り落ちて尻を強く打って、駆けつけた駅員の「大丈夫ですか」という声に「大丈夫だ」と答えたところと、船橋駅前からバスに乗って団地前で降りたとき、同じ団地の知人に肩を入れて身体を支えられたまま二Ｆの自宅まで送ってもらったこと、の二つだけだった。

驚いたことに、翌朝、妻の鈴の言うには「昨日は大分ご機嫌でしたわね。随分たくさん召し上がったのでしょ。お帰りになったときこのパンの袋を大事そうに握りしめていましたよ」と言われて、天然酵母パンという印刷の入った袋とパン一つを見せられたのだが、これにも全く記憶がなく、思わず「ウソだろう」と言

ったのだった。
　このパンの袋は二つ入りのもので、一つだけ入った袋を大事そうに抱えていたということは、どこかで買い求めて一個を食べたという状況を示しているわけである。帰りの電車のことも記憶にはないのだが、状況から、錦糸町駅で昔の部下と別れて電車に乗り船橋駅で降りたはずだから、パンは錦糸町で買ったか船橋で買ったか、したはずであるが、それがどちらであるか、全く覚えていないのだ。一つは食べたという状況だと言うが、それをどこで食べたのかについても記憶は定かでないのである。
　こんなことは初めてだ、と淳は思った。記憶を失ったときの自分は一体どんな振る舞いをしたのだろう。まさか喧嘩を売ったり、ものを盗んだりはしないだろうと思うが、記憶にないということは何と不気味なことであろうか、とも思う。こんなことがたびたび起きるとしたら自分はどんな死に方をするか判ったものじゃない、と淳は思った。その意味で淳は一度死の世界を潜ってまた生き返ったのかもしれなかったが、その死の世界の記憶は全くないのだった。ひょっとしたら、駅の階段を転げ落ちたのも死の世界での出来事だったかと思われたが、足腰や尻に痛みがあるのは事実だから、転倒もまた事実であろうと思うほかないのだった。
　淳は母方の祖父佐藤丑松に「偉くなれ」と言われたことをときどきふと思い出すこともあったが、結局自分は少しも偉くならないで終わるのだなと思った。淳が遠藤家ゆかりの好色の血の騒ぎを覚えることも再三再四のことであったが、ここまで来れば多分、恥ずべき幾多の事実を誰にもばれることなく墓場まで持ちおおせることになるのではないかと、密かに安堵するのだった。

了

二〇一二年一一月　六日(火)初筆
二〇一二年一一月二〇日(火)加筆
二〇一五年　八月一九日(水)加筆